

ルトが言つた、「フン族のところからラインへ帰るときに、どうして河を渡るつもりなんですか。」するとハゲネが、二度とそういうことはあるまい。と答えた。トロネゲの勇士はなお語つた、「我々の今度の旅路で、臆病気を出して逃げて帰えるような卑怯者があつた場合、そういう輩はこの河で死ぬ死を遂げる方がよいと思うので、こうやつておくのだ。」(1581~1583)文字通り背水の陣の覚悟で死の国への旅を続ける。彼ら一行はベツヒエラーレンに到着し、ハゲネは辺境伯夫人より楯のみを貰い受け、他の一切の引出物は辞退する。彼一人戦さの準備を進める。

エツツェルの城に近づくにつれて、ハゲネはますます好戦的・挑発的言動が多くなる。たとえば、途中まで迎えに出たディエトリーヒから、クリエムヒルトは今だにジーフリットの死を歎き悲しんでいると聞くと、<「あの方はいつまでなりと歎かれるがよい。」とハゲネはいつた。「勇士はずつと昔討たれて死んだ人だ。妃はフン族の王をこそ愛されるのが当然で、ジーフリット殿は二度と戻つてきしはしない。とうに葬られているのだから。」(1725)>また、エツツェルの城に到着してすぐさまクリエムヒルトと激しい口争いを始める。城にはいつて後もフォルケールと二人で歩哨に立ち、クリエムヒルトに対して媚を送つて和解をしようなどとは一切せず、却つて、夫ジーフリットを討つたのは自分で、復讐の意があるなら思うようにするがよいと堂々と挑戦している。

以上見るように、ハゲネは運命から逃れる術はないものかとは一度も考えてもみない。こうして悲劇的な戦いは始まる。ハゲネはクリエムヒルトとエツツェル王の間にできた王子の首をはね、和議をもしりぞけ、死へ行き着くまでは決して到底勝目のないこの戦いを止めようとはしない。己れの運命の赴くまゝに突き進んでいく。

「ニーベルンゲン之歌」の悲劇性は勿論両族の全員の死滅によつてその極みに達するのであるが、ゲルマン民族の運命への従順性の観点から主要人物の言動を考察すれば、グンテルやその他の人物は受動的な動きしかしておらず、運命の手の中へ自らの意志でとび込んでいくのは、つまり死なざるを得ないのだという明確な意識のもとにいるのは、ハゲネひとりである。クリエムヒルトの復讐の念を基盤として、その上で縦横に動いているのはハゲネである。ハゲネのこの動きが推進力となつてこの叙事詩の悲劇性は形成されていく。ハゲネの言動こそが能動的に筋の展開に参与し、運命を不可避なものとして突き進んでいくゲルマン民族の姿をもつとも鮮かに示している。

(完)

## アフガニスタン調査の記録から

東洋史 伊 東 隆 夫

アフガニスタンの面積は、日本の1.7倍といい、その総人口は、1300万とも、1400万ともいわれている。広い国土の中で、遊牧生活を余儀なくされているものも多いし、かつ女性には戸籍が

ないというから、到底正確な数がかめられないものと思われる。

総人口の約60%以上がバシュト族(パターンともいう)で、現王家はもちろん、政府交官筋も、この部族出身者で占められており、従つて彼等の他部族に対する自尊心が強いことも、如実にうかがわれる。この部族の言語は、バシュト語で、これについての専門的研究は、広大言語学教室の先輩、縄田鉄男氏が、かつて総会で発表されたことがある。一因みに、われわれの調査行に対して、同氏が公務多端の折にもかかわらず、遙々テヘランから来られ、始めの10日間通訳として、ご協力をいただいた。ここに重ねてご好意に対し、深謝申しあげたい——このバシュト語を、アフガニスタンの公用語としたいという国の意向は、明らかに察知されたところで、公務員には、その習得が要請されているようで、講習を終了すれば、給与が上がるとも聞かされた。都のカーブルには、バシュト語の書物だけを取扱かう店もあり、中学校の英語教科書の巻末の単語集には、この国の共通語であるファルシー語(アフガン・ダーリともいう)とバシュト語が対照して書かれていた。アフガニスタンの言語が、右の様であるとしても、国民の90%以上が、文盲という現状では、われわれからすれば、又何を可言わんやと申すより外はない。気の毒と言おうか、哀れと言おうか、約1カ月にわたつて生活をともにしたわれわれが雇つた2人の運転手(1人は、バシュト族、他はモンゴル系のハザラ族の出身者)との接触で隊員が一様に痛感したところでもある。

縄田氏と別れた以後のわれわれは、有無を言わず、文盲の彼等と不完全なファルシーで意思の疎通をはかるのに苦労させられた。文字を書いても駄目で時には動作でまたある時には絵を書いて一しかも彼等の発想がわれわれのものとは異なっていることもあつて、意思が通じた後で大笑いすることも、再三ならずあつた。

自国の地図局発行の地図を、驚きの目をみはつてみつめているから、「君の町は、地図の此処に書いてあるよ」と、図上に示してやつても、そこに書かれている文字が読めない哀れさ。「ホウ私の町が、この地図に書かれているのか」と、握手を求めて来たある町のゲートを護る兵士もいた。

このような国民の姿が、いつになつたら見られなくなるであらうか。言語と文盲についての、私の感懐の一端を、ここに抜き書きした次第である。(1964.10.28)

## テヘラン便り

昭和44年10月2日記

縄田鉄男

1. 日本学術振興会の西アジア地域研究調査実施のためイラン国テヘランの出張を命ぜられ、昭和44年4月2日、SK984, DC-8で12:20分羽田発マニラ、バンコック、カラチを経由して、同日23:35分任地テヘランに着く。